

今更後悔しても追放したのはあなたです2

（冤罪で離縁された元王太子妃は辺境で溺愛される）

マチアス

フェリシアを追放した
クズ王太子。

ジュリー

もう一人の聖女。
マチアスを箠絡し、
フェリシアを追放させた。

フェリシア

聖女の力を持つ元王太子妃。
剣術にも優れ、
並大抵の敵では太刀打ちできない。
過去にパン屋で暮らしていた
経験からパン作りが得意。

クリストフ

辺境伯にして騎士団長。
領地の瘴気を浄化してくれた
フェリシアに惹かれている。

ペギー

クリストフの信頼する侍女長。
フェリシアを可愛がり、
母のように接する。

ジョイス

クリストフのもとで働く
侍女の一人。
フェリシアをよく
気にかけている。

Main Characters

主な登場人物

目次

この胸の高鳴りはなんでしょう	7
自分の始末は自分でしていただけますか？	62
偽りの結婚、始めます	83
追放したのは、殿下ですよ？	131
誰の夫なのかわかっていらっしやいます？	159
全然気に入りません	234
エピローグ	287

この胸の高鳴りはなんでしょう

辺境伯である、クリストフ・アンドレ・モントプールに、正式にチエルダム領の民として迎え入れられたフェリシア・ルブランは、新たな人生を歩き始めている。

街に近衛騎士団が乗り込んだあの日。フェリシアは、屋敷の人たちに聖女であり王太子妃だったことを明かし、これまで黙っていたこと、そして皆を巻き込んでしまったことを謝罪した。自分の意思だったわけではないとはいえ、王族側だったフェリシアは、重い税に苦しんできた彼らに罵倒されても致し方ないと覚悟していた。けれど、母のような存在である侍女長のペギーにそっと抱きしめられて、安堵の涙がこぼれた。

ほかの人たちも誰ひとりとしてフェリシアを拒否せず、チエルダムの一員になることを大歓迎してくれた。

領地の人たちへの説明は、クリストフから。

もちろん、王太子妃だったことを聞いて怒りをあらわにする者もいたようだ。しかし、近衛騎士団にひとりで立ち向かい捕まっていた女性を助けたことや、これまで植物を枯らしたり人の健康を蝕^{むしは}んだりする瘴^{しやうき}気の浄化をしてきたことから、ほとんどの人たちがフェリシアを温かく迎え入れて

くれた。

そしてフェリシアは、再びパン屋として働き始めている。

これまでも街の住民は、フェリシアが焼く珍しいパンの虜だったのだが、女性を助けたことから英雄視され、パン屋の行列が長くなったのは言うまでもない。

街の一角にあるパン屋の厨房でせつせとはちみつパンを焼き続けていたフェリシアは、焼けたばかりのパンを手到店頭に顔を出した。

「ロージー、列は短くなったかしら？」

販売を担当しているロージーのそばかすのある優しい顔が、心なしか引きつっている。

「それが、長くなってるの……」

「は？」

ロージーの衝撃的な言葉に驚いたフェリシアは外に出ていく。するとそこには、フェリシアを守るためにクリストフが配置してくれたチェルダム騎士団の兵士ふたりが護衛に立っており、フェリシアに向かって肩をすくめた。

「人が増えて……ます？」

「ええ、ご覧の通りで」

兵士が手で示した列の最後尾は確認できないほど遠かった。

「これはまずいわ。夜まで焼いても足りないかも」

パンを焼けるのは、フェリシアただひとり。パン焼き窯もすでにフル稼働していて、これ以上生

産量を増やすのは難しい。

「申し訳ないけど、購入者を制限させてもらうわ」

「あつ、お待ちください」

フェリシアが販売打ち切りの謝罪のために列の後方へと駆けだすと、護衛兵士のひとりが慌ててついてきた。

そもそもあのボンコツ——キルタンス王国の王子であるマチアス・ピエール・アモンが、近衛騎士団をこの地に派遣しなければ、護衛など必要なかったのに。

瘴気を浄化できるフェリシアは、この国ではふたりしかない聖女のうちのひとりにあたる。

王太子妃だったフェリシアを追放し、自分がその座に収まろうとしたもうひとりの聖女、ジュリー・カミュが役に立たないらしく、聖女を求めて騎士団を派遣してきたのだ。

これまで散々フェリシアを冷遇し、いらないと追放しておいて今さらだ。

「クリストフさま？」

列の途中にクリストフとその護衛のティマーの姿があり、足を止める。

「フェリシア、どうしたんだ？」

「それはこちらの台詞せりふです。なにをなさっているのですか？」

二十五歳にして広大なチェルダム領を統治するクリストフは、領地運営で忙しいはずなのに、どうして……

「なについて、パンを買うために決まっているだろう？」



「辺境伯さまが？」

「今はフェリシアのパンが食べたい、ただの男だ」

クリストフはさも当然のように青い瞳を輝かせて言う。

辺境伯たるもの、使用人に命じて買いに行かせるか、フェリシアに直々に屋敷に持ってくるよう指示したっておかしくない。それなのにまったく偉ぶることなく、常に領地の民と同じ目線でものを見て特別扱いを好まない。

それにしても、パンを買う列に並ぶとは……

「それは光栄です。ですが……」

フェリシアが表情を曇らせると、クリストフの顔に緊張が走る。

「どうかしたのか？ 体調でも悪いのか？」

フェリシアの額に手を当てる彼は、少し過保護だ。心配してとっさに触れただけだとわかっているけども、彼の体温を感じるとなぜか胸が締めつけられるように苦しくなる。

「いえ、ぴんぴんしておりますからご心配なく。本当に申し訳ないのですが、焼ける数に限りがありまして。このあたりよりうしろの方には、お売りできなくて……」

「そうか。それは仕方がない。さすがにこの列をさばくのは無理だったか」

クリストフは肩を落とす。彼はフェリシアの焼くパンをたいそう気に入っているのだ。

パン屋の開店時も列ができたが、最近ほどほどに落ち着いていたのに、先日の大立ち回りのせいで注目を浴びてしまい再びこの人だかり。ありがたいけれど、さすがに目が回りそうになって

いる。

「よし、フェリシアは店に戻りなさい。あとは俺が対処しよう」

「対処？」

どういうことかと思ひながら見ていると、自分よりうしろの人たちに売り切れの謝罪を始めるのでひどく焦った。辺境伯にこんなことをさせるつもりはこれっぽっちもなかったからだ。

「クリストフさま、私がいたします」

「謝罪は俺にもできる。だが、パンはフェリシアにしか焼けないだろう？ 皆が待っているぞ」
笑顔のクリストフに背中を押され、申し訳なく思ひながらも店内に戻った。

「ロージー、お疲れさま」

夕方になり、ようやく店のドアに閉店の札を下げたフェリシアは、丸イスに座って放心しているロージーに声をかける。

「私よりフェリシアよ。体力があるのは知ってたけど……まだ立っていられるなんて」

「あはっ。私もさすがにちよっと疲れたかも」

フェリシアはロージーの隣に行き、同じようにイスに腰かけた。

「へとへとだよね。ほんといつもありがとう。給金は弾む」

「助かる。でもこの調子だと、人手が足りないんじゃない？ 私みたいな売り子は確保できるだろうけど、パン焼き職人は……」

たしかに、人を雇うのも簡単ではない。

「……うん。でも、人を増やすつもりはないの。パンの数を制限して、予約制にしようかなと。ただ、それまでできるかどうか……」

フェリシアは、今も店の前で護衛をしている兵士に視線を送って言った。

フェリシアの念願叶って、クリストフの協力のもと、この店をオープンできた。このまま順調に経営できれば、彼から借りている開店資金も返済できるだろう。しかし、事態が変わってしまった。王都のマチアスにここにいると知られた以上、再び自分をさらに騎士団を差し向けてくるはず。どうやらフェリシアがいなくなった王都は瘴気を浄化できず、悲惨な状況に陥っているようだし。

フェリシアには剣の心得があり、自分ひとりくらいはなんとかなるものの、今日の客の列に騎士団が突っ込んできたら……さすがに太刀打ちできない。パンを焼くのが楽しいからなんて、呑気なことを言っではいられなくなってしまった。それに、領地を守るために鍛錬を積んでいる兵士を、フェリシア個人につけてもらうのは気が引ける。

「フェリシアのパン、すごくおいしいから続けてほしいんだけど……またフェリシアが危ない目に遭うのは見てられない」

先日の騎士団とのぶつかり合いをまさに目の前で見ていたロージーも、あきらめ顔だ。

「……うん」

「なんでフェリシアがこんな目に遭わなくちゃいけないの？ たまたま聖女だっただけなんでしょう？」

自分のために怒ってくれる人がいるのは幸せだ。

「そうね。でも、聖女なのは事実なの。くよくよしたって仕方ない。クリストフさまが居場所をくださったから、ここで聖女としてできることはなんでもして必死に生きていくつもり。でも、皆に迷惑をかけるのだけは怖くて」

正直な気持ちを打ち明けると、ロージーは小さなため息をつく。

「私には難しくて、どうしたらいいかわからないけど、小さくまとまっちゃうフェリシアなんて見たくないな」

「えっ？」

「顔にいっぱい小麦粉をつけて一心不乱にパンを焼く姿とか、狂気を感じるくらいなんだけど」

「ちよっと、狂気ってなによ」

口を尖^{とが}らせたものの、心当たりはある。一旦パン焼き作業に入ると、自分でも恐ろしいほどの集中力を発揮するのだ。

「先日もバツカス村でも、兵士もびつくりの剣さばきだって有名になってるよ。そういうフェリシアを見てみると、できないことなんてないんだなって勇気をもらえるところか……。王太子妃だった頃、そういうことは一切できなかったんでしょ？」

ロージーの質問に大きくうなずく。本当に窮屈な生活だった。

「フェリシアはもう自由なのよ。せっかく歩きたい道を進めるようになったのに、周りのことばかり気にして歩くのをやめちゃうのはもったいないよ。迷惑をかけられて嫌な人は勝手に去っていく

から、フェリシアはドーンと構えて思うがままに突き進めばいいんじゃないかな」

「ロージー……ありがと」

きつと彼女も去っていかないひとりだ。クリストフも、屋敷の人たちも。



「これ、多すぎやしないか？」

パン屋から戻ったクリストフは、執務室のデスクに置かれた書類の山にため息をつく。

「どうせ明日も行かれるおつもりなんですよね。だったら、仕事を終わらせてください」

辺境伯であるクリストフに遠慮なく苦言をぶつけるのは、首席補佐官のピーター・グラハムだ。

彼の丸眼鏡の奥の目がいつもより鋭い。クリストフがパン屋に出かけたせいで、スケジュールの調整が大変だったのだろう。

「わかったよ」

クリストフは革張りのイスに腰かけて、早速万年筆に手を伸ばした。

「パンは買ったのですか？ いえ、フェリシアさまには会えたのですか？ が正しいですね」

彼がそう言い直すのは、クリストフのフェリシアへの想いに気づいているからだ。いや、おそらく侍従長のフィリップも、侍女長のペギーも、そしてメイドたちも気づいている。——クリストフが自分の気持ちを自覚する前から。

「フェリシアには会えたが、パンは売り切れで買えなかった。先日の騒動で兵士に捕まった女性を助けたからか、フェリシアは真の女神さまだと崇拝の対象になったようだ。その女神さまが焼くパンにはご利益があるとか」

「あやしい宗教のようですね」

並んでいる間に聞いた話をする、ピーターはようやく頬を緩めた。

「まったく。フェリシアはそんなふうに崇め奉^{あがたてまつ}られることを好まないだろうが、石を投げられるような事態にならなくてよかった」

本音を漏らすと、ピーターは小さく二度うなずいた。

女性を助ける際、フェリシアはみずから聖女だと名乗り出た。その後、あの騎士団長が余計なことを口走ったばかりに、王太子妃だったことまで知られてしまった。

この地の人々は、王室が課す重い税のせいで苦しんでいる。瘴気の浄化に聖女を派遣してくれないことも、隣国のカシサ帝国の脅威を放置したままであることも、不満の対象となっている。

だからもしかしたら、フェリシアにその不満がぶつけられるのではないかと危惧していた。

ところが、歩けなくなるほど力を使い果たしながら瘴気を浄化したり、カシサの侵略があったときにみずから戦闘の中心に突っ込んでいったりという行動を皆が評価していて、彼女を嫌う者はいなかった。

「ただし……」

クリストフが言葉を濁すと、ピーターの顔が陰しくなる。

「このまま終わるわけがない、ですね」

「そうだ。王都の瘴気の浄化がうまくいっていないのであれば、マチアスは喉から手が出るほどフェリシアが欲しいだろう」

周辺の大地を健やかに保ちたいからではなく、浄化できないことで自分の求心力が落ちるから――

マチアスのクズぶりをよく知るクリストフは、彼の心の中が手に取るようにわかってしまう。改めて、あんな男の妃にさせられてしまったフェリシアを不憫^{ふびん}に思った。

「あの行列は危険だろうな。人質にされかねない」

「なるほど。単にパンを買いに行ったのではなく、周辺の状況を確認しに行ったのですね」

その通りなのだけれど、こうしてあからさまに言葉にされるとなんとなくきまりが悪い。こっそり調査をして、格好をつけたかったみたいで。

「パンを買いに行ったのだから？」

「ああ、すみません。フェリシアさまに会いに行ったの間違いでした」

そこは訂正しなくていいのに。

「とにかく護衛を増やしたい。あと、閉店の頃に迎える馬車を送ってくれ。さすがにあそこにひとりで置いてはおけない」

騎士団を立て直して再び領地に乗り込んでくるまでに時間はかかるだろうが、それがいつなのか特定できない限り、フェリシアをひとりにするわけにはいかない。夜通し護衛を置いても構わない

が、無防備な街の家より周囲を塙で囲まれているこの邸宅のほうが安心だ。

いや、自分の近くに置いて自分で守りたいという気持ちが大きい。

「かしこまりました。手配いたします」

神妙な面持ちで腰を折ったピーターは、早速執務室を出ていった。



ロージの帰宅後、厨房の後片付けにいそしんでいると、入口のドアをノックする音がした。

「もう閉店なんです」

ドアを開けるとティマーがいて驚いた。クリストフが使用する馬車まで横づけされている。

「どうしたんですか？」

「クリストフさまより命じられて参りました。ここにおひとりでいらつしやるのは危険なので、屋敷に来ていただきたいのです。すでにジョイスがお部屋を整えております」

「そんなご配慮まで……」

たしかに毎日毎日、一日中緊張したまま生活するのはこたえる。それに、フェリシアのためだけに配置されている護衛の兵士に申し訳ない。辺境伯邸にはティマー以外にも交代制で護衛がいてくれるので、自分がそちらに行ったほうがいいだろう。

「わかりました。すぐに用意してきますので、お待ちください」

フェリシアは厨房にすっ飛んでいき、形がいびつで売り物にならなかったパンを紙袋に詰めたあと、二階の部屋に置いてある剣を背負った。クリストフがいてくれればこの剣の出番はないかもしれないけれど、念のためだ。

護衛の兵士にお礼を言ったあと馬車に乗り込むと、馬車は滑るように動き始める。王室が所有する馬車ほどのきらびやかさはないものの、乗り心地は最高だ。イスはふかふかだし揺れも少ない。

この馬車は、チエルダム職人が丁寧につくった逸品だとか。クリストフはこの馬車で別の領土に赴き、職人の腕のよさを売り込むそう。この付近の領土を治める貴族は、ほとんどチエルダムの職人が作った馬車を愛用しているとピーターが自慢げに話していた。

クリストフは小さなことでもコツコツと誠実に仕事をこなす。その姿が、領土の民を虜にする。フェリシアも虜になったひとりだ。

屋敷に到着すると、ペギーが満面の笑みで出迎えてくれた。

「おかえりなさいませ、フェリシアさま」

「ただいま」

まるで実家のように迎えてもらえて、胸が温くなる。

公爵家に生まれたフェリシアは、すでに家族を失っている。誰ともわからぬ暗殺者たちに惨殺されたのだ。

母の機転でフェリシアだけ助かったが『あの娘、どこに行った。地の果てまで追いかけてやる』という低い声が耳に残っており、剣の達人となった今でも恐怖を拭えないでいる。それから名前を

変えて生き延びてきたけれど、再び家族のような存在に出会えるとは思わなかった。

「フェリシアさま！」

ジョイスもフェリシアに飛びつかんばかりの勢いで屋敷の中から駆け出てきた。

「またお世話になります」

「お世話だなんて。フェリシアさまにとっては不本意かもしれませんが、私たちはうれしいんですよ。特にクリストフさまがお喜びです」

声を弾ませるジョイスに首を傾げる。

——迷惑をかけ通しなのに？

「今日はバロンたちコックが、腕によりをかけて料理をこしらえております。中にどうぞ」

「ありがとうございます」

「フェリシア！」

ペギーに促されて玄関ホールに足を踏み入れると、二階からクリストフが駆け下りてきた。

「クリストフさま、お招きくださりありがとうございます。馬車までご用意いただき……あつ」

お礼の言葉を口にしていている途中で、いきなり抱きしめられたので目を瞠る。

「す、すまない。失礼なことを……」

我に返った様子のクリストフは、フェリシアを解放してばつの悪そうな顔をしている。

「ずっと心配なさっていたんです。パンを買いに行かれたのも、フェリシアさまの様子が気になって仕方なかったからだ。そうですね？」

ペギーの問いかけに、クリストフは耳を赤くした。

——本当なの？

「そんなにご心配をおかけしているとは知らず……申し訳ありません」

行列に並んでいた彼と顔を合わせたとき、そんな様子は微塵もなかったのに。最近ばかりパンを気に入っているようなので、それが食べたかったんだと勘違いしていた。

「ああつ、違うんだ。いや、違うない」

クリストフがたじたじになっているのを見て、ジョイスが笑いを噛み殺している。

「形が悪いもので申し訳ないのですが……って、つぶれてしまいましたけど」

フェリシアは、クリストフに強く抱きしめられたせいでつぶれた紙袋に入ったパンを差し出す。

「重ね重ねすまない」

クリストフが大げさなほどに肩を落とすので、おかしくてたまらない。

「また焼きますから」

「いや、これも食べるぞ。食事にしよう」

クリストフは紙袋の中を覗き、つぶれたパンを見て笑いながらも目を輝かせている。

こんな不完全なものを差し出しても喜んでくれる彼の優しさにほっこりした。

バロンがこしらえてくれたラム肉のワイン煮込みは、口に入れた瞬間とろけていくほど軟らかくて頬が緩む。

「幸せ。さすがはバロンさん」

様々なスパイスを駆使しているからこそ、この複雑かつ濃厚な味を実現できているのだろう。

「フェリシアに料理を褒められるようになって、バロンの腕がぐんと上がったんだ」

つぶれたちみつまをちぎりながら、クリストフが教えてくれる。

「そうなのですか？」

「バロンの作る料理はこれまでも格別だったが、それに慣れてしまつて感謝の言葉をかけることを忘れていた。俺たちだつて仕事で成功したときに喜んでもらえる、ますますやる気が出る。それと同じだったのに」

クリストフの言う通りだ。

ひとりで黙々とパンを焼くのも楽しいけれど、屋敷の人たちやパン屋の客たちが笑顔で頬張る姿が、なによりもご褒美になる。そしてもっとおいしいパンを焼こうと努力する。

「そうですね。あとでお礼を言いに行かなくちゃ」

部屋の隅に控えているジョイスは、クリストフとフェリシアの会話を聞きながらにこにこ顔だ。

「クリストフさま、ワインを追加されますか？」

フィリップがクリストフの空いたグラスを見て尋ねる。

「飲みたいところだが、酔つてしまうのでやめておこう」

お酒に弱い彼は、一杯飲んだだけなのにうつすらと頬が赤く染まっている。さらには心なしか瞳も潤んでおり、妙な色香を感じてどきりとした。

「今日くらい、よろしいのでは？ せっかくフェリシアさまがお戻りになられたのですし」

「酔つてしまつては、フェリシアと話ができなくなるだろう？」

クリストフはラム肉にナイフを入れながら返す。

—— 私との会話が楽しいと思つてくださっているのかしら？

パン屋の二階で暮らすようになってから、クリストフと言葉を交わす機会がかなり減つてしまつた。それを少し寂しいと思つていたフェリシアは、クリストフも同じ気持ちなのではないかと期待して心を躍らせた。

夕食後、クリストフに呼ばれたフェリシアは、彼の部屋に足を運んだ。

「座りなさい。ジョイスにハーブティーを持ってきた。安眠効果があるそうだ」

部屋にレモンに似た香りが漂っている。

「失礼いたします。本日は、馬車をありがとうございました。また部屋までお借りして——」

「随分他人行儀だな。この屋敷から出たとはいえ、フェリシアはもう私たちの家族のような存在なのだ。そんなふうに言われたら、寂しいじゃないか」

クリストフはそう言つて微笑んだあと、ハーブティーを口に運ぶ。

「ありがたいお言葉です。本当のことを言うと、パン屋が忙しかつたから気が紛れていただけで、クリストフさまや皆さんの声を聞けないのが寂しかったです」

フェリシアは正直な気持ちを明かした。朝早くからパン生地を仕込み、日が暮れてからは、後片

付けや売り上げの集計等やることだらけで、食事をとるのも忘れて眠りにつく毎日だった。それでも、王宮の窮屈な生活から逃れて念願のパン屋を持てた高揚感から、ここまで走りに走ってきた。

しかしふとした瞬間に、クリストフの顔が浮かぶのだ。今日あった楽しい出来事を共有したいと思ったり、新しいパンのアイデアを聞いてもらいたかったり……

そのたびに屋敷を恋しく思い、窓から見ていた。

「本当か？」

カップをソーサーに戻したクリストフが、心なしか身を乗り出して尋ねる。

「ええ」

「そうか」

クリストフはなぜか満足そうに微笑み、目を細めた。

「パン屋のこれからについてですよ」

彼からは切り出しにくいのではないかと思い、フェリシアが口を開く。

「そうだ。あれほどの大盛況。本来ならもっと人を増やして、チエルダムの特産物にしたいくらいなのだが――」

「特産物？ ただのパンですよ？」

話が大きくなるので声が裏返ってしまった。

とはいえ、以前お世話になったパン屋のロセター夫妻が褒められているようで感激だ。フェリシ

アのパンの腕は、ロセター夫妻仕込みだから。

「いや、この地で収穫した質のいい小麦やライ麦、果物を使って作ったパンは、領土の自慢だ。今はこの地を訪れる旅人もおらず、宿屋すらない。だが、いつか王都のように人が集まる場所にしたいのだ。フェリシアのパンは、それを牽引する存在になれると思っている」

パンひとつで各地から旅人がやってくるわけがないのは、クリストフも承知しているはず。ただ、魅力的な領土にするひとつの手段として、フェリシアが作るパンを考えてくれているのだろう。

「クリストフさまは、相変わらず褒め上手ですね。うれしいです」

「フェリシアを見習ったただぞ」

彼はそう言いながら再びハーブティーを口にしたが、表情が硬い。

「しばらく、お休みしたほうがよろしいでしょうか」

ずばり切り込むと、クリストフの動きが止まる。

「必ず再開できるようにする。だから今はこらえてくれないか。住まいもここに移してほしい」

――やっぱり、そうなるわよね。

フェリシアは心の中でため息をつきながらも納得していた。

「かしこまりました。あの行列に騎士団が突っ込んできたら、とんでもないことになります。街の皆さんは、私が元王族の一員だったと知っても、受け入れてくださいました。そんな人たちを傷つけるわけにはいきません」

「受け入れるどころか、真の女神さまらしいぞ」

「はいっ？」

「女神さまが焼いたパンにはご利益があるそうだ。味がいいことに加えて、そうした付加価値まで生まれている。まあ、騎士団相手にひとりで立ち向かう姿を見たら、誰だってそうなるだろうけどね」

まさか、そんな事態になっていたとは知らず、目をぱちくりさせる。

「……あれは、つい」

自分のせいで女性が傷つけられそうになっているのを見て、いてもたってもいらなかっただけだ。フェリシアを差し出せば済むのに、街の人たちが一丸となってかくまってくれたのだから。

「フェリシア」

真顔になったクリストフは、いきなりフェリシアの手を握る。

「は、はい」

「もう二度と無謀なこととはしないと約束してくれ。フェリシアの剣の腕が立つことはよくわかった。だが、万が一なにかあつてからでは遅い」

彼の言いたいことはよくわかる。フェリシアが逆の立場だったら同じように訴えるからだ。

バッカス村での戦いの折に、『クリストフさまに万が一のことがあれば、この民は明日の希望を失うのです。あなたが最後の砦とりでなのですよ？ ですから、安易に命をかけてはなりません』と偉そうなことを口走ったが、自分にかけるべき言葉だった。兵士たちに向かつていったときは、命をかけようと思ったわけではなかったけれど、結果的にそうになっていた可能性だってある。この地の

瘴気の浄化の最後の砦とりでとならなくてはならないのに。

「反省しています」

なんの言い訳もできず素直に首を垂れると、クリストフはようやく手を放してくれた。

「熱くなる気持ちにはわかるんだが。……俺も反省しないと」

あのとき、クリストフも怒りに満ちた表情でフェリシアの横を駆け抜け、あつという間に騎士団長を斬った。チェルダム騎士団の到着を待つことなく、ひとりで兵士たちを追っていった。

「似た者同士なのかな、俺たち」

クリストフがぼそりとつぶやくので、緊張がほどける。

「そうかもしれませんね。とっさに体が動く癖が……」

「行動力があると自画自賛していたんだが、フェリシアを見ると“無謀”の文字しか浮かばなくなつた」

彼は肩を小刻みに揺らして笑う。しかし一転、表情を引き締めた。

「ピーターに命じて、王室の動きを探らせている。マチアスは近いうちに必ずまた兵士を送り込んで――」

「騎士団を出すでしょうか？」

フェリシアはクリストフの言葉を遮った。

「そりゃあ、フェリシアを王都に戻したいだろうから」

フェリシアも、つい先ほどまでそう考えていた。しかし、あのボンコツマチアスの性格を鑑かんがみる

に、また大掛かりな騎士団を差し向けるとは思えなくなった。

「先日は、チェルダムに聖女がいるのではないかとあたりをつけて、聖女を王都に連れていくために騎士団を派遣してきました。でも、私がここにいると知られた今、二王妃だったフェリシア・ルブラン^{ルブラン}を王都に連れ戻すことが任務となります」

「そうだな」

クリストフはフェリシアがなにを言わんとしているのかびんと来ていない様子で、首をひねっている。

「自分が捨てたくせに今度は力ずくで連れ戻すなんて、プライドだけは山のように高いマチアス殿下がするとは思えなくて」

「なるほど。みずからの失態を認めるようなものだからな」

クリストフは腕を組み、物思いにふけっている。騎士学校時代のマチアスを思い出しているのかもしれない。

「その通りです。ですから事を荒立てず、こっそり私を連れ戻す算段なのではないかと思ったのです」

騎士団を再び派遣すれば、注目の的となる。そうすれば、判断を誤った無能な王太子として国中の人々の記憶に刻まれる羽目になる。

フェリシアを『悪徳聖女』と罵^{のの}って追放した代償は潔く払ってほしいところだが、マチアスのことだ、あの謁見^{えっけん}の間での出来事はなかったことにしているだろう。

「内密に事を進めれば、『反省したフェリシアが望むから、仕方なしにもう一度迎えてやった』と器の大きさをアピールできるわけか」

「本当に破滅を使わないとわからないのかしら」

思わず語気が強くなる。都合のいいように罪を被せておいて戻ってこいなんて、ありえない。

「その破滅は、指定した一部にだけ使えるのか？ たとえば、マチアスの部屋にだけというような」

「破滅の力は、寿命が短くなるという代償があるようなので試したことがなくて……」

街のひとつやふたつは破壊できるはずだが、逆に狭い範囲にだけ効かせることが可能かどうかは、フェリシアにもわからない。

「寿命が？ そんな力、絶対に使うな」

焦りの色を浮かべた顔で何度も首を横に振るクリストフは優しい。マチアスなら、必要とあらばフェリシアの寿命などおかまいなしにその力を使えと命じるはずだ。

思い出せば思い出すほど、虫唾^{むすず}が走る。

「どうした？」

背筋がゾクツクとして自分の体を抱きしめると、クリストフが心配している。

「マチアス殿下のことを思い出したら震えてきて」

「鮮明に思い出さなくていい。取るに足りない男だ」

「ですが、嫌な記憶は残りがちですよね……」

マチアスの言動がいろいろと衝撃すぎて、忘れたくても忘れられない。もちろん、悪い意味で。

「ほんとだな。へっぴり腰で剣を振ったのを、残念ながら覚えてる……」

クリストフまでそんなことを言うので笑ってしまった。その光景が容易に頭に浮かぶのだ。

そういえば、立派な剣を腰に下げ、偉そうに騎士団に命を下す姿は何度か見たが、マチアスが剣術に励んでいた記憶はない。あの腹の出た体型と鈍い動きからして、出征してもなんの役にも立ちそうにないけれど。

「昔から変わらないんですね。せっかくクリストフさまが現実の厳しさを教えられたのに」

ペギーが、クリストフは付度^{そんたく}なしに容赦なくマチアスを叩きのめしたと話していたが、そういう人がもつと必要だった。マチアスをたしなめられる父が生きていればと、残念でならない。

「彼は深く考えないからな。単にやられて悔しいだけで、強くなつて見返そうという向上心はまったくなかった」

フェリシアはその言葉に大きくうなずいた。

剣術だけでなく、考えることすら放棄している。本能のままに突っ走るのがマチアスだ。マチアス好みの丰满な胸を持つジュリーに骨抜きにされ、後先考えず今の状態を作っているのもそう。

「おっしゃる通りです。たとえ私を連れ去つても、瘴気の浄化をしないと拒否したらそれまでののに。連れ戻しさえすればなんとかなると思つているのが不思議です。多分そこまで考えが及ばないのでしょーうけど」

「拒否、できないだろう？」

クリストフの言葉に、一瞬息が止まった。その通りだからだ。

「フェリシアは、人々が苦しんでいるのを見て見ぬ振りができる人間ではない。マチアスの存在なんて関係なく、瘴気の浄化をするはずだ」

そう断言されて、どきりとする。

「……そう、ですな」

無理やり妃にしておいて、とことん冷遇してくれたマチアスにこそあれ、瘴気に苦しむ民に恨みはもろろんない。

腐った王族に嫁がせるのが嫌だった父も、聖女であることは隠し、しかしその力が役立てるなら使いなさいとこんこんと説いた。だからフェリシアもできる範囲で浄化をしてきた。

「安心しなさい。フェリシアをマチアスに渡すようなことは絶対にない。この命に代えても守つてみせる」

「クリストフさま……」

自分のために命までかけてくれる人がいる。もちろん、そんな事態になつてほしくないけれど、彼の強い気持ちがある。

もうずっと孤独に生きていくのだと思つていたから、余計に。

「フェリシアにはできれば自由に生きてもらいたい。聖女であることは、ある意味重い」

瘴気の浄化ができるのは聖女だけなので、フェリシアはいわば国の行く末を背負っているようなところがある。

その頂点に立つ国王やマチアスが国から出ていけと言うのだから、もうキルタンス王国のことなど気にせず生きていこうと思っていた。

けれど、知ってしまったのだ。この国にはクリストフのような優しくして責任感のある人間がいることを。瘴気に悩まされながら、必死に生きる国民がいることも。

少なくとも、自分を受け入れてくれたチエルダム領の人々を見捨ててまで自由を得たいとは思わなくなっている。

「だが、その役割を背負ったのは、フェリシアがそれだけの器だからというような気がしている。いつか、聖女の力が人々の役に立てるといいな」

クリストフの言葉に、胸の奥がざわつく。

ただひたすらに、自分の人生をめちやくちやにしたマチアスから離れたかった。しかし皮肉なことに、浄化によって人々に笑顔が戻るのは幸せなことだったのだ。

「器、なんて……」

「気負う必要はない。ただ、フェリシアがしたいことはこれからも全力で支えるつもりだ。手伝えることがあれば、遠慮なく言いなさい。護衛でもなんでもするぞ。こう見えても、それなりに剣の腕は立つんだ」

「知ってます」

重くなってきた空気を払拭^{はら拭}するように、クリストフは自分の右腕をポンポンと叩いて冗談めかして言う。

「それにしても、マチアスは少しも成長しない男だな。いずれ国王の座に就くと思うと、気絶しそうだ」

「側近も言いなりなんですよね。歯向かえば自分の首が飛ぶので」

「よく無事で出てこられた。もう大丈夫だからな」

「はい、心強いです」

クリストフの“大丈夫”という言葉が胸にすんと落ちてくる。目の前に問題が山積しているというのに、彼がそう言うからには絶対に切り抜けられると思えるから不思議だ。

「それにしても、マチアスがどんな手を使ってくるか予測できない。いつまでフェリシアを苦しめれば気が済むんだ。まったく、どうしようもないクズだ」

クリストフがあきれた様子で言い捨てる。

「『戻ってきたいなら、戻らせてやるぞ』とか言ってきそうで、なんとも」

「たしかに。マチアスなら言いかねない」

「まあ、なにも考えてないですから、交渉もなにもなく派兵してくるかもしれません」

フェリシアがぼそりと漏らすと、クリストフは納得したように深くうなづく。

もちろん、騎士団を出さないという推察が間違っている可能性だってある。ただ、マチアスの単純な思考と曲がった性格を思うと、正解である気がするのだ。おそらくクリストフも同じ気持ちだろう。

宰相が悪知恵を働かせる可能性はあるけれど、ジュリーの浄化がうまくいっていないのであれば、

もともと政治不信だった国民の間で暴動が起こりかねない。農作物が枯れば、それこそ命の問題になるからだ。

マチアスは、切羽詰まった状況で冷静になれる人ではない。感情に任せて突っ走り、自分に従わないものをあつさり切り捨てる。宰相の言葉など、あつてないようなものだ。

つくづく、とんでもない男が国の頂点にいるのだなと、落胆する。

「マチアスのことをよくわかつているんだな」

「やめてください、その言い方」

肌が粟^{あわ}立ってしまう。

「理解しているわけではなく、一日見ていれば誰でも気づきます」

「間違いない」

あつさり同意するクリストフも、マチアスの軽率さに気づいているひとりのようだ。

「国王は……」

クリストフは顎^{あご}に手を添えて考え始めた。

国王は、マチアスほどバカではない。そしてマチアス以上に冷酷だ。

「国王の腹の中は読めませんが、現王妃との間にできた王子はまだ五歳ですし、現時点で跡継ぎになれるのはマチアス殿下しかいません。となると、マチアス殿下を守るために動くはずです。やはり、私を秘密裏に王宮に連れてこいと命を下すのではないでしょうか」

「無能な息子を持つと大変だな。ラージュ公爵が生きていらつしやれば、この国もつとよいほう

に向かっただろうに」

思いがけずクリストフの口から父の名が出て、フェリシアの目がキョロツと動く。

——まさか私がラージュ家の娘だと気づいてる？ ううん、父は王族のお目付け役として有名だったから、知ってるだけよね。

一瞬焦ったけれど、これまでの自分の行動にラージュ家を匂わせるものはなにもなかったはずと、気持ちを落ち着かせる。

——クリストフになら、すべてを明かしても大丈夫かも。

むしろ過去を洗いざらい打ち明けて、楽になりたい。今もどこかで自分の命を狙っているかもしれない刺客について告白すれば、きつと守ると言ってくれる。

けれど、どうしても話せなかった。騎士団相手にひとりで立ち向かえるほどの剣術を身につけたのに、あのときの血の生臭いにおいや母の断末魔の叫びが、フェリシアを臆病にさせる。

もし自分がラージュ家の生き残りだと知られたら……この屋敷の人たちまで殺されてしまうかもしれない。いくらクリストフやティマー、そしてほかにも護衛の兵士がいても、貴族軍人だった父を筆頭に、騎士だった兄、そしてそれなりの護衛もいたラージュ家だってそうだったのだ。

「フェリシア、どうした？ 顔色が悪いぞ」

「なんでもありません。ちよつと疲れたのかな……」

また心配をかけてしまったと慌てて取り繕^{くづ}う。すると彼は、手を伸ばしてきてフェリシアの額に触れた。

「熱はないようだ」

「は、はい」

もう何度も抱きしめられているのに、こうして少し触れられるだけで心臓がドクツと大きな音を立て始める。

——これはもしかして……

夫だったマチアスには一切感じたことがないこの感情は……恋、なのだろうか。

突然訪れた素性もわからない自分を丁寧にもてなし、聖女だと明かしたくないと察すれば、盾になって守ってくれた。この地を重い税で苦しめてきた王族の一員だった過去を明かしても、彼はフェリシア自身を見てくれた。いつだってクリストフは、フェリシアの味方だったのだ。

それに……領土の民のために勤勉に働く誠実な彼が、フェリシアの目には魅力的に映っている。

「パン屋を休めと言っても強行するし」

「すみません……」

襲われたばかりなのにパン屋を再開したのは、なにかしていなければ落ち着かなかったからかもしれない。パンを焼いているときだけは、難しいしがらみについて考えずにいられるのだ。

「女神さまは、少し休みなさい。ロージーの仕事に関しては、俺が手配しておく」

「あつ、ロージーのことをお願いしようと思っていたんです。ありがとうございます」

パン屋を一時閉店すれば、ロージーの仕事がなくなる。なにも言わずともそこまで気づいてくれるクリストフは、本当に素晴らしい領主だ。

「実は、街のはずれの修道院で孤児を世話する人間が足りなくて困っている」

「修道院？」

フェリシアも、ロセター夫妻にお世話になる前は修道院で育った。いつも庭の大きなりんごの木に登り遠くの景色を楽しむ振りをして、こっそり泣いていたっけ。

両親と兄を一度に亡くし、名前を偽って生きていくにはまだ幼すぎたのだ。

「そう。シスターたちが子供たちの面倒を見てくれているのだが、元氣いっぱいの子供たちの相手をするのも大変だね。人を探しているんだ。ロージーならできるんじゃないかと思つて」

「もちろんです。ロージーは人当たりもいいし、子供好きです。彼女にぴったりかも」

クリストフもロージーと話をしたことがあり、彼女の明るい性格を知っているのだろう。そもそもパン屋の売り子として見つけてきてくれたのは彼だし。

「ロージーに聞いてみよう」

「はい。あの……修道院の経営はどうされているのですか？」

フェリシアがいた修道院は、付近の裕福な人々からの寄付で回っていた。その一部のお金を使い、地域の貧しい人たちにパンを焼いて配るという慈善事業もしていた。そうしていたのは、孤児たちが地域から孤立しないようにという思いが込められていると聞いたことがある。ロセター夫妻がパン焼きの指導に来ていたのは、そのパンを作るためだ。

ただ、いつも経営はぎりぎりです。シスターたちが四苦八苦していたのは知っている。

「以前は寄付で賄っていた^{まかな}ようだが、瘴気のせいで農作物が収穫できないと、寄付する余裕がある

者も少なくてね。ただ、子供たちは将来チエルダムを背負う宝だ。今は集めた税から運営費用を捻出している。とても十分とは言えなくて、心苦しいのだが」

「守ってくれる大人がいるのはとてもありがたいものです。私もなにかできればいいのですが……」

「フェリシアは、まず自分のことだ。少々不自由な思いはさせるが、耐えてほしい」

クリストフが頭を下げるので驚いてしまう。パン屋を一時閉店にしなければならぬのは、決して彼のせいではないのに。

「耐えるなんて、そんな。またこのお屋敷にお世話になれると思うと、うれしいんです。やっぱりひとりはちよつと寂しかったので」

「ちよつと？」

彼は眉を上げて尋ねてくる。

「すぐくの間違いでした」

「そうか。実は俺もだ。……って、無理やり言わせたな、俺」

優しい表情で笑うクリストフは、とても辺境伯とは思えない。決して偉ぶらず、同じ立場で言葉を紡いでくれる。

「どちらかというと、フェリシアがいなくなつて俺のほうがこたえたな」

「えっ？」

「目が勝手にフェリシアを捜してしまふ。それなのにどこにもいなくて、寂しかった」

フェリシアにまつすぐな視線を送る彼は、とても冗談を口にはしていない。

「あつ、あの……」

「すまない。ただのひとりごとだ」

彼はそう言うと、残りのハーブティーを一気に飲み干した。

——まさか、クリストフさまも寂しかったなんて。ううん、彼は優しいから、私がここにいやすいようにしてくれているだけよ。

彼を大切に思う気持ちが恋かもしれないと勘づいたからか、クリストフの言葉一つひとつにいちいち動揺してしまう。

「ペギーがきつと、フェリシアのお世話ができると張りきる。また付き合つてやつてくれ」

「付き合うだなんてとんでもない。本当にありがたいです」

母のように優しく包み込んでくれるペギーは、長らく知ることのなかった心の安定をもたらしてくれた。亡くなった娘をフェリシアと重ねているところはあるだろうけれど、それでペギーの心が落着くならフェリシアもうれしい。

「今後については、また明日話そう。ゆっくり眠って疲れを癒やしてくれ。ああ、明日は朝寝坊するんだぞ」

パン屋は人々が寝静まっている早朝から仕込みを始めるため、朝が早い。クリストフはそれを知っているのだ、そう言うのだろう。

「そうします。おやすみなさい」

フェリシアは立ち上がつて腰を折ると、クリストフの部屋をあとにした。

翌朝は寝坊するつもりだったのに、朝日が昇るのと同時に目が覚めてしまった。

二階にある部屋の窓を開けると、高い山から吹き下ろしてきたかすかに土の香りが混じった風が、フェリシアの自慢のプロンドの髪を揺らした。

「もうすぐ寒くなるわね」

間近に迫る山の木々の葉は赤や黄色に色づいているが、その葉も風に煽^{あお}られて空に散っていく。

王都より標高の高いこは、厳しい冬となるのだろうか。寒いのが苦手なフェリシアは憂鬱^{ゆううつ}ではあるけれど、今年はクリストフをはじめとした屋敷の人たちと一緒に、楽しく過ごせそうだ。

「ちょっと散歩しようかしら」

庭には、ティマーが育てた色とりどりのダリアが、美しさを競うように咲いている。フェリシアは白いブラウスとボルドーのスカートに着替えてシヨールを羽織ると、早速部屋を出て階段を駆け下りた。

「フェリシアさま、どちらに？」

玄關を出ると、すぐに護衛の兵士ふたりに捕まる。以前はいなかったため、警備を強化してくれているに違いない。

「お庭の花を見に。門の外には出ないようにします。よろしいでしょうか？」

自分のせいで夜通しの勤務になっただろう彼らに申し訳なくて、控えめに尋ねる。

「それではご一緒——」

「俺が行こう」

背後から聞こえてきたのは、クリストフの声だ。

「おはようございます」

「おはよう。寝坊はどうした？」

彼はくすくす笑う。

「早起きの癖が……。でも、昨晚はハーブティーのおかげでぐっすりでした」

マチアスからいつなを仕掛けられるかわからないのに、ここ最近では一番深く眠れた。それがハーブティーの効能なのか、クリストフがいる屋敷に戻ってきて気持ちが緩んだからなのかは定かではない。

「花を見たいんだろう？ 行こうか」

クリストフが目配せすると、兵士たちは離れていった。

ティマーが丹精込めて育てた花々は、乾いた風に吹かれて同じ方向になびいている。以前、大きな木のある丘で、黄金色の小麦が風によつてうねりを作っていたことを思い出す光景だった。

「これはなんという花だろう」

クリストフは白い花のにおいを嗅ぎながらつぶやく。

「ダリアです。昔、パン屋で働いていた頃、街のあちこちに咲いていました」

誰かが植えたのか自生していたのかわからないけれど、あの街も花があふれる素敵な場所だった。「美しい街だったんだね。チェルダムも、花であふれる領土にできればいいんだが……」

瘴気にやられて、花も枯れてしまいうに違いない。

「努力します」

「あつ、いや、そういう意味ではなくて」

遠回しに瘴気の浄化をせよと命じたように聞こえたのではないかと焦っているようだ。

「わかっています。私がそうしたいだけです」

「これからは俺もいる」

クリストフはそう言いながら、フェリシアの隣にしゃがんだ。

「はい。ありがとうございます」

「俺も、フェリシアがいてくれると元気が出る。苦しい局面に立たされても、ひるまずもう一歩進めるといふか……」

——励まされてばかりの私も、少しは彼の役に立てているの？

「それは光栄です。おてんば娘は元気だけが取り柄ですから、いつでも使ってください」

彼のほうに顔を向けて言うのと、微笑んでくれた。

そのとき、背後でなにかの気配がして振り返る。クリストフも視線を鋭くして同じように振り返った。

「あつ……申し訳ありません。せっかくなのでいい雰囲気でしたのに」

一瞬、緊迫した空気が張り詰めたが、そこにいたのはペギーだった。

それにしても、いい雰囲気とは？

「朝食の準備が整ったのですが……」

「すぐに行く」

クリストフが答えると、ペギーは口角を上げて首を横に振る。

「いえ、ごゆっくり。もうすっかりご夫婦のようで、うれしいですわ。それでは」

ペギーは心なしに弾んだ足取りで屋敷の中に戻っていく。

——夫婦のよう？ クリストフさまと？

彼に抱く気持ちが悪くはないかと疑い始めたばかりなのに、そんな指摘をされて目を瞠る。

——どうしよう。とんでもなく恥ずかしい。

涼しい風が吹いているというのに全身が火照る^{ほて}ように熱いのは、照れくさいからだ。

クリストフの腕に自分の腕がわずかに触れていることに気づいて、不自然に一歩離れてしまった。

「あつ、すまない」

「ち、違うんです」

距離が近くて不快だと思われたら心外だ。むしろ、こうして近くにいられるのが心地いいのに。

誤解されてはまずいとクリストフを見上げると、なぜか耳がほんのり赤く染まっている。

「えっと……」

「食事にはようか。今日は大麦の粥にすると話していたぞ」

クリストフはフェリシアを促して歩き始めた。

粥にしたのは、きっとフェリシアがパンを焼けなかったからだ。

「また厨房をお借りしても？」

「催促に聞こえたか？」

「ええ、少し」

フェリシアが冗談めかして答えると、クリストフは口角を上げる。

「すみません、催促です」

ビシッと背筋を伸ばし、丁寧に腰を折る。こんなことで頭を下げる貴族が、ほかにどこにいます。ふふっ。催促承りました。なににしようかな」

「はちみつパンは焼いてくれ」

すかさず言うクリストフは、よほどはちみつパンが気に入っているらしい。たしかにほんのり甘くてふわふわのあのパンは、店でも飛ぶように売れていく。

「もちろんです。最近忙しくて、新作に取りかかれなかったんです。いろいろ試してみます」

この領地で採れる果物を分けてもらい、様々なパンを試した。いくつも新作が生まれたものの、はちみつパンを作って以来新しい商品を並べられていない。店が忙しすぎて、そこまで手が回らないからだ。

今回の閉店は残念だけれど、ここはよいほうに考えて、新作の開発にいそしむのもいい。

「催促しておいてなんだが……休めばいいんだぞ？」

「店のあの忙しさに比べたら、休みみたいなものです」

好きなことができるのだから、趣味の時間のようなものだ。

「フェリシアの体力は底なしだな」

「よく言われます」

ロセター夫妻のパン屋でも、聖女発覚のきっかけとなった井戸に行つての水汲みは、ほとんどフェリシアの仕事だった。大量の水は重くなるが、涼しい顔をして黙々と運んでいたら、近所の子供たちに『怪力だ』と褒められたこともある。いや、褒められたのか驚かれたのか定かではないが、「相当鍛えただろう？」

玄関のドアを開けてフェリシアをエスコートするクリストフは、興味津々だ。

「強い人が好きなので」

だからといって、自分が強くなる必要はないのだけれど。

ただ、家族が何者かに襲われて命を落としたあの日から、生き延びるために鍛錬を積んできたとは明かせず、そうごまかした。

幼い頃から「強い騎士」にあこがれていたとはいえ半分は冗談だったのに、クリストフはなぜか目を丸くしてフェリシアを見つめる。

「どうかされましたか？」

「いや。それじゃあ俺も好かれるために、訓練の時間を増やさなければ」

「クリストフさまは十分強いですよ」

以前騎士団の訓練に交ぜてもらったが、彼は頭ひとつもふたつも抜きんでいた。チェルダムでは遠方にある騎士学校に入学する者は皆無らしいので、基本の型からクリストフが教えているらし

く、それも仕方がないのだけれど。

「……と自負していたんだが、とある聖女さまに度肝を抜かれて、まだまだだったと意気消沈している」

彼が面白おかしく語るので、フェリシアの顔に笑みが広がる。

「そんな聖女がいるんですか？」

「いるんだよ、これが」

クリストフとの会話はとにかく楽しい。夫だったマチアスとは会話が弾むどころか、口を利くとすら億劫^{おっくう}だったのに。クリストフは誰かとかわる楽しさを思い出させてくれた。

「もつとおしとやかにするべきですね」

「そうかな？ 凛々しくて魅力的で……俺は好きだけどね」

彼の口から『好き』という言葉が出たせいか、心臓が早鐘を打ち始める。しかも、『凛々しくて魅力的』だなんて。

死の恐怖を拭うためにひたすら鍛錬を積んだことで、他人に頼らずともそれなりに戦えることに誇りを持っていた。しかし一方で、女性としての魅力は皆無だと思っていた。

顔を合わせた瞬間、マチアスに舌打ちされるくらいには色香もないし、男性に媚^こびへつらいもない。晩餐会で多くの男性から熱い視線を送られる貴族の令嬢たちとは違う自分に気づいていた。暗殺者に襲われることなく、公爵家の令嬢として育っていれば、自分もあちら側の人間だったのかもしれないと考えたことはあるけれど、今の自分が嫌いなわけでもない。おかげであのボンコツ

王太子に嫌われて、素敵な人たちに出会えたのだし。

ただし、魅力的という言葉からはほど遠いと思っていた。

——ただのお世辞か。

真に受けて動揺するなんて、どうかしている。

妙に照れくさくなり彼から視線を外すと、食堂の入口で待ち構えているジョイスが、こちらを見て満面の笑みを浮かべている。

「ほんとだ、いい雰囲気」

「はっ？」

ペギーになにか吹き込まれたのだろう。

ジョイスが漏らしたひと言に過剰に反応してしまい、なんとなくクリストフとの間に距離を取る。彼もまたばつが悪そうな顔をしていた。

「どうかされたのですか？」

食堂から顔を出したフィリップが、不思議そうにこちらを見ている。するとジョイスが彼になにやら耳打ちをした。

「ああ」

なにか『ああ』なのだろう。……って、夫婦のようだと言われているに違いないが。フィリップの表情までも明るくなり、フェリシアは顔が赤くなっていないか心配になった。

生き生きと働くフェリシアにパン屋を休業させることは、断腸の思いだった。しかし納得して、ふたつ返事で受け入れてくれた。彼女自身の危険はもとより、領地の民に迷惑をかけたくない一心なのだろう。せっかく自由を得たのに、まだあのクズに付きまとわれる彼女が不憫でならない。

騎士学校にはいろんな仲間がいたけれど、マチアスほど他人に不快感を与えるのがうまい者はいなかった。そのマチアスに付きまとわれる人生なんて、不幸しか待っていない。絶対に自分が断ち切ってみせる。

屋敷に戻ってきたフェリシアは、使用人たちと楽しそうに過ごしていてホッとしている。またパンの焼けるこうばしい香りが屋敷中に漂うようになり、それだけで仕事がかどるから不思議だ。「クリストフさま。仕事にキレが戻ってきましたね。やはり大切な方がそばにいますと、気持ちの入りが違うのでしょうか」

クリストフに次々と決済の書類を渡していくピーターが言う。

「なんの話だ。俺はいつもこうだが」

「そうでしょうか？ フェリシアさまが屋敷からいなくなられてから、数枚の書類に目を通すだけのため息をつけておられたのに。自分のサインまで間違えられたこともありましたよね」

「だからなんの話だ」

心当たりがありすぎてばつが悪く、クリストフは苦し紛れに同じセリフを繰り返した。すると

ピーターは笑いを噛み殺している。

彼が言う通り、フェリシアがどうしているのか気になりすぎて名前を書き損じたときは、自分でも驚いた。これでは彼女に笑われると集中し直したものの、今思えばいつもの自分ではなかった。間違いなく、フェリシアに恋をしている。彼女が屋敷に戻ってきてからの心の弾みようからして、もう認めざるを得ない。

「そんなことより、王都の状況はどうなっている？」

「気まづくなったクリストフは話を変えた。」

「近衛騎士団が王都に戻ってから、目立った動きはないようです。いつもなら、戦地の噂が一気に広まるのにそれもなく、どこに出征していたのかと人々が不思議がっているようで」

やはり、フェリシアの予想は間違っていないのかもしれない。マチアスは大切な聖女をみずから追放したと国民に知られたくないのだろう。そのために緘口令かんこうれいを敷いていると思われる。

「王都周辺の瘴気は？」

「近くの村の小麦畑が全滅だそうです。もうひとりの聖女の浄化がうまくいかず、その村の者が暴徒化して王宮に押し寄せたとか。鎮圧されましたが、瘴気が浄化できない限り、同じことの繰り返しでしょう」

——それではやはり、近いうちにフェリシアを奪いに来るだろう。

「なんとしてでもフェリシアを守り抜く。ただ、彼女にこの緊張が伝わらないようにしてくれ」

ピーターにそう伝えると、彼はふっと笑みを漏らす。

「わかります。愛する人には笑顔でいてほしいですね」
「は？」

まさにその通りなのだが、わざわざ口に出さなくても……

「事態が動いたら、早馬が来ることになっております。ですからそれまでは、フェリシアさまと仲を深めてください。いっそ、奥さまにお迎え——」

「次の仕事は？」

ピーターが余計なことを言い出したため、遮った。

屋敷の皆がそうなることを望んでいると知っている。けれど、焦って逃したくはない。

——俺、相当惚れているんだな。

これまで女性にも婚姻にも興味がなかったのに、この変わりよう。自分で戸惑うくらいだ。

「失礼しました。先ほどラージュ公爵閣下の剣について探っている者から連絡が入りました。聞いたことがない話でしたので、お耳に入れておきます」

ピーターは眼鏡のリムに触れ、真剣な表情をする。

「なんだ？」

「ピグラムと呼ばれている暗殺者集団をご存じですか？」

「ピグラム？ 俺は聞いたことがない。暗殺者集団なのか？ 騎士や兵士ではなく？」

「はい。どの騎士団にも属さず、暗殺ばかりを請け負う手練^てれたたちがいるとか。それこそ、ひとり殺れば一生食えるくらいのけた違いの報酬を要求するそうで、誰もが依頼できるわけではなさそう

ですが」

騎士学校にいた頃、国中の名高い騎士たちの噂は耳に入った。その中には悪名高い者もいたのが……そんな集団については話題に上ったことはない。

「実は彼らも国中の鍛冶屋を回っているらしく、もしかしたらラージュ公爵閣下の剣を探しているのではないかと思ったのですが……」

ピーターの話を聞いて、視線が鋭くなる。

「可能性は高いな。絶対に渡してはならない。そんな集団にあの剣が渡ったら、何人の血が流れるか……」

一切刃こぼれせず、硬い岩でも打ち砕くという伝説の剣は、永遠に人を斬り続けられる。魔力が込められているせいで、ラージュ家の血筋の人間でなければ重くてまともに扱えないらしいが、実際のところはわからないため、警戒しておく必要がある。

といつても、剣の行方がわからない限りお手上げだ。

「剣が彼らの手に渡らなかつたとしても、マチアスが金にものを言わせてその集団を雇ったら、かなりまずい」

それこそ騎士団を動員されるより厄介だ。なにせチェルダムの騎士団はクリストフが鍛え上げたといつても素人の寄せ集めで、殺し屋として訓練を受けた人間には敵わない。

「フェリシアを守らなければ」

聖女が必要なことから、彼女の命が奪われる可能性はまずない。しかし、領地の民を人質にされ